

リトアニアは今や臨戦態勢

高井 晋

ロシア・ウクライナ戦争は、当初ロシアが目論んだ短期決戦は雲散霧消し、今やロシアがこれまで占領したウクライナ東南部の地域の確保で手一杯の感がある。加えて、ロシアとクリミア半島を結ぶケルチ大橋が破壊され、戦況はウクライナ側に傾いてきたようである。

リトアニアは、ロシアの飛び地カリーニングラードとロシア間の鉄道が敷設されているが、ロシアの暴挙に反発して、6 月に EU の制裁対象の貨物を積んだ列車のカリーニングラードへの乗り入れを禁止すると発表した。



(出典: <https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/829631>)

旧ソ連構成国のリトアニアは、EU 内の対露強硬派で、ウクライナを積極的に支援しているほか、ロシア天然ガスの禁輸などより厳しい対ロシア制裁の導入を求めている。

カリーニングラードは、ロシアのバルト艦隊の司令部が置かれる重要な軍事拠点であり、核弾頭搭載の短距離弾道ミサイル「イスカデル M」が配備されているという。

ロシアはこれに反発し「敵対行為」と非難し報復を仄めかしたが、リトアニアは、EU の決定に沿うものであると説明している。

筆者は、現在、NATO Centre of Excellence for Operations in Confined and Shallow Waters (COE CSW) と米海軍大学校が共催して、10 月 10 日から 13 日までリトアニアの首都ビルニウスで行われる「Conference on Operational Maritime

Law 2022」における発表準備でホテルに籠っている。

部屋のテレビを見ることもなく見ていると、ウクライナ戦争の報道について、客観的に見る日本の報道姿勢とロシアから次の攻撃対象と名指しされたリトアニアの報道姿勢が大きく異なっていることに気づかされた。

日本では、ウクライナの主張とロシアの主張をなるべく平等に取り扱い、戦場の様子を見ながらコメンテーターの解説を聞いている場面が多いが、当地では、「ウクライナ 24」という 24 時間番組があり、ウクライナと一緒に戦っている臨戦態勢にあるといった姿勢で、ウクライナが置かれた状況、そしてウクライナの主張を詳細に発信しています。

不思議なことに、この番組のみならず他のウクライナ関係の番組でも、プーチン大統領の顔写真は一切出てこないのです。プーチン大統領の顔は、ウクライナとリトアニアにとって疫病神なのでしょう。

またリトアニアは、2021 年秋に議員団が台湾を訪問し、台湾と実務関係を構築した。

これに反発した中国は、北京に在るリトアニア大使館の職員を国外追放した事件があった。

NATO 諸国とアメリカが、民主主義諸国から多くの海洋法専門家を招聘した今回の国際会議は、力による現状変更を強行するロシアや中国という全体主義国と臨戦態勢にある、軍事的な小国リトアニアの勇気ある行動への文化的支援なのであろう。